

武徳君の立職を祝す

結制について

今日は三月の五日啓蟄、まことに春らしい日和の佳き日、方丈様のご長男武徳君が立職の式を挙げられるめでたい日であります。

今日の式典「法戦式」に参列したことのない方が殆んどかと思えますので、簡単にご説明かたがたお祝いの言葉を述べさせていただきます。

インドでは四月から七月にかけては雨季で、毎日凄い雨が降ります。そこでお釈迦さまは、四月十五日から七月十五日までの九十日間、お弟子さん方を祇園精舎とか竹林精舎といったお寺に集め、外出を禁じ、合宿修行させたのであります。これを「雨安居」とか、九十日間の合宿修行なので「九旬安居」といい、また「結制」というのであります。九十日安居の制度のもとに修行僧を結集するとう意味であります。そしてこの九旬安居を重



ねた回数により僧侶の階級がきまるようになり
ました。

この九旬安居、結制の法がインドから中国に伝わりましたが、中国にはインドのように雨季がありません。しかし、結制という九旬安居は修行上たいへん有効適切な方法です。で、九十日間の安居を、夏冬二回おこなうようになりました。そしてこの結制のことを「江湖会」と呼ぶようにもなりました、その由来は、というと、八世紀の頃、中国は唐の時代、江西省に馬祖道一、湖南省に石頭希遷（この方の即身仏が総持寺に祀られてあります）という偉い禅師さまがおり、おおいに禅風を挙げられました。そこで当時、「二大師にまみえずんば共に禅を語るに足らず」といわれ、天下の雲水たちは江西省の馬祖道一、湖南省の石頭希遷と、両禅師の間を往来して修行しました。それらの雲水を称して時の人々は「江

湖の禪客」といいました。江湖とは天下という意味で、そこから雲水が大勢集まって結制安居することを「江湖会」というようになりました。

この結制修行、江湖会が日本にも伝わり、明治以前までは方々の寺々で結制修行がおこなわれ、大勢集まって僧侶としての資質の向上に精進したのであります。ところが明治にはいつて教育制度が確立し、教育機関が着々整備されるに伴って教育方法もおのずからかわり、学校や僧堂で年間を通して集中的におこなうようになりました。そのため、方々の寺々で分散しておこなわれていた結制は教育機関としての意義の大半を失ない、結制修行は僧堂に任かせる形となりました。

しかし、お釈迦さま時代から続いた歴史ある結制ですので、実際の修行は僧堂にまかせるとしても、儀式として残ることになって今

日に及んでいるのであります。

結制中もつとも大事な儀式は五則法問といつて、結制のはじめ五日間の法要であります。通例第一日は住職、第二日は首座、第三日は書記、第四日は副寺、第五日は知客というふうな結制修行上重要な役職を担っている五人の方々が、公案といつて修行と悟りについで重要な問題を討議し合うのですが、今日多くは五則の第一日の住職の結制上堂と第二日の首座法戦式だけがおこなわれております。

僧侶の三出世

では首座というのはどういう人かといいますが、よく内閣の首班などといわれますが、その首班に相当する言葉、または学校の生徒会長や級長といったような意味で、結制修行中、常に一般修行僧の先頭に立つ重要な役職であります。したがって昔は雲水の中の最古

參の者を選んでこれに充てたものであります。だから首座のことを別名「長老」ともいうのであります。ところがいつの間にかやられが変わり、一度首座の職につかないといつまでも小僧として一般修行僧の下積みとなつておらねばならず、したがつて出世の端緒をつかむことができないということ、実際の年齢と得度してからの年齢が規定の線に達すれば誰でも必ずこれを勤めなくてはならないのであります。つまり、僧侶になる者は誰もが首座の職につき、これからおこなわれる法戦式で大勢の修行僧と問答をかわさなければならぬのであります。

さて私ども曹洞宗の僧侶は、生涯を通じて三度出世の式を挙げることになつております。その第一が本日の法戦式で、首座の職に立つところから「立職」といいます。今までは「沙弥」とか「小僧」といわれておりまし

たが、これからは「座元」という位になつて、法衣やお袈裟に白色の裏付けのサンをつけることが許されます。それで大勢の修行僧の中でも、「長老さま」と見分けられ、尊敬されるのであります。

第二の出世はお袈裟替えの「転衣」といいまして、福井にある大本山永平寺と横浜にある大本山総持寺に拝登して「瑞世」という本山一夜住職の儀式を済ませると、今度は「和尚」の位に昇り、色のついたお袈裟をかけることが許されます。それでも法衣はまだ黒色のままです。

第三の出世は「建法幢」、法幢、即ち仏法の旗印を建てることですが、これは結制修行を主宰することであり、方丈様はもう三十五年も前、永盛寺住職時代にすでに結制をおこなわれておりますので、今回は結制上堂は略されて首座の法戦式だけおこなわれます



が、要するに、仏法を宣揚し、多くの修行僧を指導して一人の首座を育成するのが建法幢で、これをおこなうと「大和尚」の位に進み、はじめて色のついた法衣を着用することができるのであります。

さて法戦式ですが、その由来をたずねると、むかしお釈迦さまが靈鷲山りやうじゆせんにおいて、高弟の摩訶迦葉尊者まかかしやうせんじやにご自分の席の半分を頒ち与えて説法を許されたのですが、その故事にならって、お師匠さまと同格で説法することを許されることを意味したもので、これを「半座はんざを分わかかつ」ともいうのであります。したがって本日首座の職に充てられる武徳君にとつては、まさに第一の出世、まことにめでたいことであります。

破顔一笑活機圓かなり

さて本日、私は西堂さいどうといつて結制修行中最高のお役目を頂戴いたしました。まことに光栄に存ずる次第であり、それだけにうれしく、歓びの氣持を拙い偈にあらわして持つて参りましたので簡単に説明申し上げ、お祝いの言葉といたします。

師資相統梅庵禪 師資相統す梅庵の禪
密々伝燈父子縁 密々に灯を伝う父子の縁
成寿山頭分半座 成寿山頭、半座を分かち
破顔一笑活機圓 破顔一笑、活機圓かなり

師は師匠、資は弟子のことで、師匠に随つて、当時開山梅庵白純大和尚の教えを相続した。その師匠と弟子は実は父と子の間柄であり、手塩にかけて綿密裡に法のともしびを伝

えて来た。その二十年に亘る精進が実って、ここ成寿山善光寺に於て半座を分かつ法戦式がおこなわれた。

「破顔一笑」というのは、お釈迦さまが靈鷲山におられた時、大梵天王が美しい花束を捧呈して説法をお願いしました。するとお釈迦さまはその花束を手にとって眼の前にかかげ、ちよつとひねっただけでひとことも説法なさない。その席にいた大勢の聴衆はその意を解しかねたのですが、ただ一人摩訶迦葉尊者だけが「お釈迦さまのお心を理解して破顔微笑、にっこりとほほえんだのです。するとお釈迦さまは、「仏法のすべてを摩訶迦葉に伝えおわった」と仰せられました。

お釈迦さまが花束を拈ぜられたのは、言葉では言いあらわすことのできないギリギリのところを示されたのであり、摩訶迦葉尊者がそれを見てにっこりほほえんだのは、仏心を

文字や言語を離れて以心伝心して体得されたからであります。ここから「教外別伝」、「不立文字」などという言葉が出てくるのであり、摩訶迦葉尊者は仏心を伝承した最初の人であり、この出会いを「拈華微笑」というのですが、このことあって以来、文字や言語に捉われず、仏の真意を心から心に伝え、師匠と弟子が密々に法を伝えてきたのが禅の大きな特徴であります。

次に「活機」とは人情の機微に通ずるはたらきのことと、武徳君はお師匠さんと同じ活機をまどかに身にそなえられたことであり、まことにめでたいことであります。なおお師匠さまの号は「大圓」ですので、それにあやかつて「活機圓かなり」と詠んだ次第であります。

方丈様、そして武徳長老さま、ほんとうにおめでとうございます。